

これは動議の提出だ。

日本の労働運動から、指導者の精神と指導者とならば、

これが動議のすべだ。僕はたゞ、この動議を、事實の上に成立させなければならぬ。熱意をもつて、こゝに提出理由の説明とする。

所謂指導者とは何にか。指導者の精神とは何にか。僕はいふ。即ち労働者の意志を調節し、其の行動を支配せんとするものだ。労働運動は唯単に、資本主義の倒壊に止まるものではない。労働者自身が次の新社会を決する、自主自治の精神の獲得運動である。労働運動の眞精神と指導者の精神とが相容れるか。專制主義と自主主義とが一致するか。

僕等は唯、それだけの問題を決定すればいいのだ。

(二)

然らば誰れを持導者と呼ぶか。彼等の多くは、自らそれを任じて居る。且つ又、彼等の行動の事實が、明白に僕等に語つて居る。友愛會々長鈴木文治君の、過去十ヶ年に渉る行動の如何を見よ。中央委員棚橋小虎君の有名な労働組合論を聞け。賀川豊彦君や久留三君の、關西労働運動に對するリーダー振り、全日本礦夫總聯合理事藤生久君の、夕張尾尾に於ける行動はどうだ。彼等は口を揃へて言ふ。——實際運動は理論の外だ。理論の非難は自分等に當てられない。故に唯、強大な團結あるのみだ。と自分等の運動のみが、實際運動なのだといふ。彼等の自惚れは勝手にさせて置く。又若し、過去の鈴木君が、無自覺なために謙謙某と握手し、労資協調を唱へたさすれば、敢て責めることなさない。そして舊式な労働組合の主張者、労働条件の改善主義者が、

「資本主義の中核を突く爲めの大團結」を旗印とするに至つたのを、喜んで迎へやう。

しかし、彼等は言ふ。それは「急進主義の非難に堪へつ、組合の進歩の爲に提燈持をして來たのだ」と

そして更に言ふ。「労働者の實際的指導を離れて何の労働運動があるか。組合を離れて何の労働運動があるか」と

彼等は、常に急進主義に反對して來た。理論の徹底を妨げて來た。労働運動の進歩、労働者の思想の躍進を抑壓して來た。官憲と同じやうに。

そして彼等自身の思想の變化は、從つて又、行動の變化は、唯、労働者の自覺に應じて、變通自在に轉換させたものに過ぎないといふのだ。彼等は偉大な超人である。彼等は絶対の智慧者である。素より、こゝに指導者の精神の神髓がある。

(三)

組合を離れて、何の労働運動もないと思ふ、めくら共には強いて覺醒を求めない。唯、こんなめくら共の存在が、労働運動を如何に阻害しつあるかを思へ！

重ねて言ふ。彼等は、労働運動の思想的進歩を、不斷に抑壓して來た。その團結の實質と、労働運動の眞精神を抜き去らうとして來た。そして常に、主張の穩健軟弱を示しつ、間接に保守的勢力と妥協して來た。

それは何の爲めか。僕等は其の理由を推斷すべく、あまりに彼等の心事を知り過ぎて居る。野心！唯之れのみだ。

労働の目的がどこにあるか、今更問ふまでも無い事だ。僕等労働者がその日々の生活によつて、即ち、自己の汗と血によつて得た理論と覺悟とは、それを既に、あまりに自明なこととして居る。しかも、指導者等は「實は際運動は理論ではない」と稱しつ、理論でない程に、しかく「自明な労働運動の目的を暗まきうとして居る。そして彼等は言ふ「労働運動の戦畧」だ」と。

(四)

労働運動は勿論口や筆の先の理論ではない。しかし、社会組織の事實に對する、明確な認識を遮つて、或ひは又、労働者の體驗の中に燃ゆる反抗精神の、勇敢な率直な行動を抑へて、其處に何の労働運動があるのだ。

彼等は言ふ。「大労働組合の出來た時、その時だ」と。どうだ諸君、「その時」が來たら彼等は、自ら態度を顛倒さして、労働者に突貫を命令しやうと言ふのだ。

お日出たいにも程がある。馬鹿にするにも程がある。僕等は、人類は、過去數世紀間、理想と正義の名によつて行はるゝ、命令と服従とに、餘りに欺かれて過ぎて居る。今又、指導者の爲に、自己の意志を蹂躪せらるべく、餘りに醒め過ぎて居る。

大労働組合の幻は結構だ。しかし、歐米に於ける、A、F、Lや、C、G、Tや、三角同盟の現實は、餘りに僕等を失望させる。日本の指導者等は、しかもそれまでに達するのには、なほ今後何十年を待たうとするのか。

労働運動は、労働者の全自我の、自主自由の、獲得運動である。「戦畧」や「指導」の爲と稱して、労働者の意志を調節せんとする所謂指導者の精神は、斷然僕等の敵だ！

労働運動の野心家！ 彼等指導者を驅逐せよ！